

No.6

烽
火

労働者協会機関誌

1962.2.14 発行

(毎月二回発行)

一部 40円

	主	張
	春斗討論集会の総括と 我々の立脚点の再評価……………	(1)
理	労働	
	国公労働者のストライキで 政府独占の死期を早めよ……………	(5)
	木山茂……………	
	組織論メモ……………	
	浅田隆治……………	(9)
	全国ニュース……………	
	(一)社会党大会と労働運動の地すべり……………	(19)
	(二)春斗状況とその課題……………	(20)

主張

「春斗討論集會」の総括と

我々の立脚点の再評価

一月十五日、昨年来約一年ぶりに旧ブントの全国的な意見交換會議が京都で開催された。

いわゆる関西ブントを中心として、東京の「西部」、「先駆」、「共旗」、及び「四国」、「長崎」等の代表者の参加した會議は、昨年のもそれと比較して大きな変化をみせた。會議の性格は関西ブント主催の「春斗をめぐる政治討論集會」であり、全国の代表はオブザーバーとして出席した。

(一) 現代世界の把握について

さて、今回の春斗討論集會は昨年よりの反省として、重大な段階に來た情勢に対する評価と、それをめぐつての政治的諸潮流の動きに対する分析を通じ、現時点における我々の立場を明確化することを目的とするものであつた。討論の項材提案者としての我々の立場は、従つて基本的には二つの

立脚点からなされた。それはまず現世界において過渡期としての位置づけからする世界革命への見通しについてであり、E.E.C.の急速な發展において再論成されつつ、景

気循環の重要な局面を迎えようとする世界帝國主義の動向であり第二には大戦後のソ連圏内部の中ソ論争、ベルリン問題に至る大

國主義的指導、(平和共存路線)の現段階における危機についての統一的把握をめぐすものであつた。いふなれば、E.E.C.と、帝國主義の弱い環としての日本の動向、そ

れによる階級斗争の展望の上に具体的な激動の要因をみつめながら、そのような要因との結合なくしては、すでに世界的な体制となつたソ連、東欧、中共の全般的な体制

危機(各国の史的に制約された不均等な發展による)は依然としてスターリン主義の基盤を國際的に持続すると我々は主張した。以上のような主張によつて、我々は従來

弱点とみられていた「ソ連論」に対する接近をはかると同時に、それを世界史的な視点のもとに社会發展の特殊な段階として統一的に把握することをめざした。

我々はブントの情勢分析にみられた思想における一つの強力な傾向としての客觀的情勢における危機の成熟に対するプロレタリアートの主体性の危機の決定的要因、危機の政治的性格に対する一方的な強調について何度かとりあげてきた。そしてその危機の表相こそが國家独占資本主義の發展による資本主義の延命にあつたことはいふまでもない。にも拘らず、現代帝國主義の諸特徴としての國家独占資本主義の世界的發展が生みだしたブロック経済と自由化が世界の諸階級に及ぼしている決定的な作用も見落してはならない。その場合ソ連の官僚制そのものの發生と体制化も、単なる主體的な要因によるものではなく、逆に延命した帝國主義の存在そのものにより強力な作用をうけているとみななければならぬ。

ここに至つて我々の主張は、依然として現代世界に現代帝國主義に対する對処、思想そのものに、第一次大戦以降の党派性の根源をみる事ができる。関西ブントの情勢分析にもとづく基本的な党派性が、そのような

情勢把握にもとずいた帝国主義政策に対する
斗争を通じてそれを打倒し、社会主義を世
界的規模で実現することを主張にみられた
のは以上のような視点からでて来たのであ
る。

(二) プロレタリア独裁について

「プロレタリア独裁」という階級的強力に
よる意識的な社会主義建設と、してその
過程にもとずく資本主義世界のもとにおけ
る疎外された人間の解放、文化革命のため
にこそ、その政治的強力を生みだす政治斗
争は現在においても世界的に決定的な意義
をもっている。したがって現代の危機の性
格の深刻さと重大さの原因は一方における
プロレタリア世界革命の未完によることは
決定的に明らかである。それ故にこそ来た
べき世界革命の波動における政治指導力
は決定的な意義をもつ。いうならば来たる
べき危機の展望は、その激動における政治
勢力の指導能力を意味する。我々が政治的
次元における世界的規模における共産主義
運動の伝統的正統派を批判するのはそこに
そもそもの出発点がある。そこからみるな
らば、先駆創刊号にみられる芳村論文が、

黒寛の主体性論による前衛党論が、党を絶
対視するところの、現実の大衆の政治への
参加とその過程での階級意識の形成を無視
したところの思想を批判する視点に我々は
同意する。にも拘らず「与えられた歴史的
社会的条件において労働者階級が行う独自
の階級形成に対する政治的にかわりあいの
有効度によつて制約される」党の組織的存
在形式という理解いふなれば党を、機能的
に理解するということは、現にそのまゝ結
論的にのべられてることによつて、その
ようなものとして自己をみつめることをし
ない容観主義的傾向をもっている。なぜな
らそのような歴史的な存在としての、「党
的な視点」が、現代世界の把握と独立して
展開されること（何故なら一方では歴史的
なものとして規定している）、しかもその
ような歴史的規制は党そのものに対する思
想をも規制することを見落している。した
がつて、方向としては党と大衆の政治組織
の内的関連性への究明という正しい方向へ
の一步を踏みだしながらも、結局は具体的
に存在していない、或は歴史的、社会的と
いう場合の「日本における」経験を捨象し
たところのコンミュニオンと党の問題とい

ロシア共産党が歴史的に提起した権力に対
する直接行動の経験的な指導と理論的な解
明と同時に、そのような政治過程、即ち政
治危機そのものに至る過程における様々な
諸問題についてである。それは、政党や労
働組合や協同組合や、自治体や議会や選挙
等……（政治的民主主義の発展程度によつ
て異なるが）といった政治制度に依然した所
の改良斗争であり、すなわちそのような斗
争は広義においては革命運動の一環とも云
えるが厳密に云うならば様々の諸戦術によ
る改良的な闘いである。このような改良斗
争と革命斗争の内的連関を、プロレタリア
ートの階級意識の成長段階として捉え、プ
ロレタリアートの大衆的規模での意識転換
への広汎な基盤として理解する。そして、
政治的民主主義の発展程度により、政党の
政治活動はより広汎に展開される。その段
階における無党派の圧倒的存在とは、原則
的には前衛党の「戦術論」における政治的
指導能力、大衆を組織的に獲得することへ
の無能力を集中的に表現している。我々が
設定した、このような戦術の基本こそが、
政治危機に至る大衆的な規模での連続的な
斗争であり、そのような斗争を第二次大戦

一般的論戦に落ち込んでしまうことになる。
プロレタリアートの自己権力論はかくて具
体的に追求されるものではなく、コンミュ
ニオン等のごとく、自然的に形成されるも
のとして、目的意識性の位置づけを不明に
する。

以上の如く、芳村論文にみられる思想が
積極的に展開されるためには、第一に現代
帝国主義がもつ危機の性格に対して明確に
対処し、第二に労働者階級の最も強力なる
高度の統一としての工場における工場評議
会（ソヴェト）を歴史的、社会的に追求し、
第三にこの過程におけるまさに階級の「前衛
としての党の役割」指導性を位置づける方
向に見出されなければならない。その場合、
世界的政治革命におけるプロレタリアート
独裁の多様な形態は、その各国における歴
史的社会的条件によつて規制される。即ち、
日本のプロレタリアートの政治斗争、広義
の意味での革命運動における革命意識を、
日本資本主義の発展とその危機にもとずい
て理解しなければならぬ。

(三) 戦術論

関西プリントは、安保斗争後直ちにプロレ

タリアートの独裁に至る、大衆の政治参加
にもとずく権力組織の問題を提起した、安
保斗争―三池斗争に至る自己防衛意識にお
ける革命性の問題を提起する基盤となつた
といえる。問題は、まさにその時点で、斗
争が何かつくりだすに至る前の時点で、市
民的「共斗組織」の形成を残して後退した
所にある。我々が日本の労働運動に対する
認識の浅さをより所にして日本における大
衆的政治組織（特に二重権力に至るとい
う意味で）を問題にしたのはこの意味にお
いてである。いはば前衛党論は近代市民に
おいては、ファシズムなどの暴力的独裁
以外においては、むしろ労働組合等とも
に合法的、制度的な存在であり、二重権力
の一方における労働者大衆の政治組織（コ
ンミュニオン、ソヴェト）などは極めて異
つた意味をもっている。労働者階級の権力
の萌芽は、労働過程における資本の支配を
くつがえすこと、その工場における「政治
的な統一」を実現するところにあらわれる。
政治ストライキにおける工場の斗争、そし
てその全国的な広がりはそのような組織実
現のための基盤とも云えるものである。

我々の主張するのは、その終局における

後いけば伝統的に生起させるところの根源
こそ、現在に至る日本資本主義の国際的な、
歴史的、社会的な位置にある。

さて、(1)現代世界の把握、(2)プロレタ
リア独裁、(3)戦術論、にわたつて我々の立脚
点をさぐつて来たが、いわばこれらの理解
そのものが共産党、社会党等に対する我々
の一つの党派性を形成している。大衆組織
への展望についてしかり、また前衛党につ
いて然りである。そしてこのあとに展開さ
れるところの、既成左翼とは異なつた政治
指導部の必要性、（何如なるレベルにおけ
る政治斗争においても、例えば政治的直感に
よるとしてもその指導部の存在は重要であ
る。なぜならそれなくしては現代社会にお
いては被支配階級は機能的に自己の意志を
集中的に表現し実現することが出来ないか
らである）とそれへの熱望において、我々
は全体としてのプリント崩壊以降の状況に足
踏みし、むしろ機能的には後退している。
いふならば一つの政治サークルが、いくつ
かの大衆組織において、有効な発言と指導
を行なつていくにすぎない。したがつて例
えば逆説的に学生運動論―疑以前衛論―と
いつたテーマの提出がおこりうる。

春斗討論集会の一つの重大なネライはこの点にあつた。にも拘らずこの面での機能の回復に対する取りくみは以外に低く、積極的な流れとしては「吸収されつつ変質させざる」見解と、または「新しい前衛党をめざす、その本質を共産主義的宣伝運動におく」という一潮流の出現であつた。かくて様々の意見を内含しながらも、問題を組織的に（いなならば組織内の民主主義原則にもとづいて）解決するための努力は我々の手に残されているものといえよう。具体的な政党の機能を未だ確立しえず、而も一地方的（といつても関西全域にわたるが）な存在にすぎない我々が、自己の立場を放棄せず、明確な見通しをもつた活動を展開することは、現時点にあつては一步踏みはずせばユートピアに陥るだろう。

四 今後の展望

かくて我々の展望は、一面においてはますます予見的な理論としての性格をつよめざるをえないし、他面においてはリアリズムに徹しなければならぬ。或は、理論面においては一人一人のすぐれた個性、情勢と意志とに支えられた創造性とんだ努力

が必要であり、実践面においては確実なる実験場口工場への取りくみが重要である。特に権力集取に対して直接行動のみを考へるのではなく、といつて改良のつみ重ねといった改良主義でもないところの、運動の連続、即ち運動主体の大衆的な規模での斗争への参加を通じての革命意識の形成に最大の力点をおく以上、運動の理論、戦術の理論の重要性は決定的である。この点から導きだされるのは、日常的、改良的な政治、経済斗争への取りくみの重要性であり、また、創造すべき新たな権力への意識的、組織的な連関である。その意味で「前衛党」の不在にも拘らず、真正面から政治斗争にとりくむ可能性とその有効性は、主体の過渡的な性格を明確にすることを条件として存在している。大衆運動の先進的部分を構成しようとする我々の態度は、いわば認識の現在の条件に依拠しつつ、一種の特殊的情勢に到達しようとする試みのあらわれであり、また党に対する思想は、最も先進的な意識と戦闘的思い、組織訓練によつてきたえられた。プロレタリア権力を奪取するにあつたつての大規模な指導部の必要性についての認識である。

我々の理解した所の全国の新左翼諸潮流は、自らの立脚点を①資本主義批判のものにおくという点で一つの偏向を犯し、特に具体的に云えば現在の日本の既成左翼批判の包括性がむしろ弱いにも拘らず問題をその面に極限し、更にはなほだしい潮流は新左翼内の分派を階級斗争の全てとみなすような小児病に陥る。或は西歐における宗教に対する、様々の常識的な、時としてプラグマチックな思想の有効性を横すべりさせ、党物神を宗教とみなし、全社会的批判を包括したと錯覚する、といった極限された状況に自らを陥し入れているかに見える。それは、ひとつには党の不在に対する新たな党の創造の困難さに対する敗北的、いわゆる「非前衛主義」であり、ふたつにはいわゆるその裏返しとしての「前衛主義」へのトウスイといった思想状況としてあらわれている。

このような現状にあつて、或る意味では、自己弁護的な「疑以前衛」としての立場を固定化する時点を脱皮し、日本プロレタリアートの最も弱い環、即ち①日本における革命的伝統を未だ自ら経験しえず、従つて権力に対する自成的な防衛組織を国民的規

模で経験しないという点、②更に様々の斗争の中にその萌芽と展望をつかみだし、明確な政治的方向を与える前衛をもたない点、に我々はとりくむ決意にもえてはいる。関西においては「工場、職場における政治活動」という実践に大中電「労研」がとりくんでいる。安保斗争の大波動においてたち切られた前衛分子はいまやその切られた線を

我々の方向につなぎはじめている。そして、大斗争のその敗北といった波動をのりこえ、持続的な努力は、新しい世代との結合を実現しつつある。関西プリント、労働者協会、社会学……は、新たな決意にもえて、この困難な事業にとりくもうとしている。

一・二八・編集委員会

労働

国公労働者のストライキで政府、

独占の死期を早めよ

△妥協の春斗方針で闘いをそらす腐敗指導部▽

木山 茂

「帝国主義的危機の深刻化に伴う日経連の高姿勢と、総評の腐敗」

したからである。それは、日く「……日本の低賃金輸出

今春斗に向けての労働者階級の立遅れと、それが、各資本主義国からの攻撃の材料にならざるを得ない。この上もなく愉快がらせ、その政府と真正面から対決して闘いを指導

海外市場で利潤をかせごうという彼等の政策の矛盾が露呈している。」と。又「われわれは、国内の勤労者の所得を増大し、国

内市場に於いて正常な消費と投資のバランスを回復させるといふ日本経済の危機解決方向の爲にも、又本年度の物価上昇が昨年の生活水準維持のためにも、最近、五、六千円のアップを必要としている観点からも、広く大市賃上げの要求を正当性あるものとして主張するものである」と。これでは、日本独占の莫大な設備投資と、海外競争に打ち勝つ為の搾取強化、反動強化の前に、見事に敗退する以外にないのである。そこで先ず第一に、現段階の日本資本主義の危機の内容について述べよう。

現代帝国主義の顕著な発展の中で注目しなければならない特徴は、帝国主義諸国家の経済的利害の対立が激化しつつあること。それは、ヨーロッパ市場を中心とした西欧の出現、アメリカの度重なる恐慌の反復と、ドル危機の深刻化、それに伴うアメリカ帝国主義の焦りとして、アメリカ大陸に於ける進歩のための同盟及び、太平洋、アジアにおける共同市場や経済協力機構の現実化、日本独占のアジア共同体市場の構想、韓国への経済的進歩等々に表現されている。これら一連の特徴は、第二次大戦後世界各国資本主義が、世界的に、循環的發展

の基礎を得、不均等発展の結果、古い諸関係、力関係を、どしどし分解せしめて来つたことを意味し、世界的に過剰生産恐慌の諸要因を蓄積しつつある過程である。これらの資本主義固有の作用が、益々、国際市場を分解、再編、強化せしめ、独占間、資本主義国家間ブロック間の競争に鋭い対立を生じせしめている。

このような、資本主義の世界的危機の中で、日本資本主義の直面せる危機は周知の如く、循環的外貨危機として、現実化しているが、これは単に日本の貿易構造がアメリカ市場に偏在していることに直接起因するものではない。むしろ、高度の資本蓄積をとげた日本資本主義の海外膨張が、現実の重大な課題となり、アメリカ、ヨーロッパ資本主義諸国との競争に打ち勝ち莫大な利潤を獲得せんがための巨大な資本投下の結果、外貨危機が現実化したのである。只、この資本主義的矛盾が、日本の持つ貿易構造、日本資本主義の構造的諸条件に制約されているが故に、しばしば、鋭い外貨不足という形態を最先にとらざるを得ないというものである。従つて、現段階の危機を単に貿易構造上の問題として見る以上、これ

は極めて、おめでたい戦術しかあみだせないばかりか、アメリカを憎んで、中、ソに笑みを投げかけるといふ馬鹿げた、しかも深刻な春斗方針しか出せないのである。

現在の経済危機が、資本主義の基本矛盾の激化である以上、極めて階級的な性格を帯びざるを得ない。池田がいち早く、倍増ムードを棄て去り、賃金ストップ、合理化と一連の反動化に柏手をかけようとしている事、日経連が高姿勢で、賃上げ拒否を声明した所から判断出来るように、階級矛盾の激化は心至である。日本独占に与えられた道は、プロレタリアートと真正面から対決し、その革命性、階級性を完全に去勢してしまふしかない。これは彼等といえども避ける事の出来ない法則である。従つて、日本の全労働者階級の道は、種々雑多な思想、理論、方針とは独立して存在する。即ち、ブルジョアジーに鋭く対決し、最大のストライキを持つて、全国的、全産業的に闘い抜き、権力打倒への前進を準備する事である。この原則的な闘いを回避する限り、プロレタリアートの全面的後退と戦線の混乱は避けられない。日共も民間も「情勢は厳しい」といふキャッチフレーズをかゝげ

ているが、その内容は、主観主義とプロレタリア思想の雑炊でしかない。何故なら、平和、独立、安保体制打破の闘い、市場構造の改革に、大巾賃上げ、最賃の闘いが解消されようとしているからである。特に、大巾賃上げ、全国最賃、反動化粉碎もスローガンとしてかゝげられはしているが、「厳しい情勢」下で、如何なる闘いを、如何にすれば、という行動方針が、完全に抜き去られ、唯、足並をそろえた統一戦線、署名、カンパニーのみが強調されている所に、注意する必要がある。として、すべての斗争を参院選挙に向けてのカンパニーにしようとするに至つては、その反階級性も甚しいばかりか、事が、何千万の労働者の生活、権利を左右するものだけに、その責任は極めて重大である。更に、一連の誤つた路線が、権威と革命的言辞によつて粉飾されているだけに、日本の社会主義革命は益々遠い未来に押しやられようとしている点から考えても、その反革命性は厳事に追求され批判され粉碎されるべきである。

一公務共闘中央の裏切りと、下部労働者の不満一

以上述べて来たような、民間の腐敗と、共産党の無能さを反映して、公務員斗争の春斗方針も、妥協と混乱の産物として、現れた。全体としての、情勢把握に於いては、ソ連を中心とした、社会主義の勢力が資本主義に対して益々、優位に立ちつつあるという点が基本に据られ、資本主義の危機の把握は、体制の対立が原動力として見なされている。又日本資本主義の危機に関して、アメリカに依存しているが故に、外貨危機に見舞われ、又アメリカが自由化を押しつけるが故に、日本の独占は、競争力強化の爲の、原材料、機械設備の輸入をやめる訳にゆかず、従つてその矛盾を、賃金引下げ、大衆の消費抑制、合理化に求める以外にないという分析をしている。そして、その結果として、不況が深刻化すると結論づける。このように、現象にのみ目を向けた、非科学的な思考が貫かれている関係上、必然的に、次のような、方針しか結論づけられない。

すべての経済危機 政治的反動化の根源は、アメリカ帝国主義に従属している所にあり、安保体制の打破、独立、平和の闘いに、あらゆる斗争を集約して行くべきであ

ると。そして、益々社会主義勢力、平和勢力を優位にする為、完全軍縮の闘いを展開すべきである。従つて、現在急激に押し進められつつある合理化攻撃、賃金ストップも、反動立法強化も、安保体制が強化されつつあるからであり、あらゆる経済斗争を安保打破に向けての政治斗争に結合せしめ、その流れは必然的に、軍備全発の平和運動に結合せしめられて行くべきであると。如何に情勢が厳しくとも、プロレタリアートの経済要求等が大衆的な政治斗争の高揚の中で解決し得る、という結論が出される。この事の本質は、国家権力に、鋭く迫る、プロレタリアートの実力による斗争を軸として、あらゆる階級を政治斗争に組入れ、プロレタリアートの支持層に転化せしめ、ブルジョアジーを危機に追い込むのではなくて、大衆斗争の盛上りを借りて、その中で、プロレタリアートの独自要求を解するといふ徹底的な日和見主義である。

又、運動論組織論の中でも、最重要点として、指摘されるのが、地域共闘、組織の統一と団結という事である。労働者階級こそが革命の担い手であり、その指導性、政治的、物質的、力量に於いても、あらゆる

資本主義的諸矛盾を解決し得るといふ最も原則的な点が欠落し、巨大な組織の構成員としての位置しか与えられていない。更に、重視すべき点は、一律五、〇〇〇アップ実現の為に、政府は第二次補正予算を組むという要求をわけながら、四月に、新賃金要求書を提示するという、非常識な方針が提示されている事である。下部労働者からの、今春斗で再度五、〇〇〇アップの闘いを徹底的にやるのか、それとも、四月から本格的に賃上げを展開するのか、という質問に対して、指導部は、今春斗の中で大巾賃上げを実現するという気構えでやつてもいい返答し、方針の著しい混乱を暴露した。以上述べた如き、基調が春斗方針を貫いているが、個々の具体的諸方針については、闘いの中で提起されなければならないばかりか、現在公務員労働者にとつて、ゆるがせに出来ない多くの重要な要求も盛り込まれている。

昨年からの引続く、物価騰きは、公務員労働者の生活を著しく低下せしめており、更に、人事院勧告によつて打ち出された、職務給体系は、益々階級制を強め、組合内部に分裂的傾向を持ち込んでいる。又、合

理化は、國權に於いては、三年先に、首切を断行するという発表があり、他に於いても、首切りは着々と準備されている。

又、公務員法改善の動きは、實質的に、刑事弾圧が進められている。この様に激しい反動化が日本独占の周到な準備によつて、進められ、政府があらゆる帝國主義的諸政策を断行しつつある時その真只中にあつて今こそ、公務員労働者が、現実に發揮し得る最大限の力を結集して、政府独占に対し熾烈な斗争を展開する事なしには、どんな要求も、実現する事が出来ないであろう。

客観的にも、主観的にも、公務員労働者の闘うエネルギーが、蓄積されつつある時に、大巾賃上げを實質上いわないという方針を中央で決定してしまい、あらゆる闘いを、安保体制打破という、大義名分に解消し、公務員労働者のストライキによる政治権力への対決を抜き去つた、統一戦線「団結と統一」論は、明らかに階級矛盾、対立タリアートの闘いを解消する事は、ブルジョアの激化する中では、敗北の路線しかあり得ない。このように産産党と民同の、反階級中賃上げ、首切拒否、最賃確立、反動的諸的ゆ着と妥協の産物が、春斗方針であり、立法粉碎の為史上最大のゼネストを持つて公務員労働者の、余春斗の中での役割り、

プロレタリアートの、革命的な賃金斗争、ゼネストを含む行動によつて、日本の帝國主義に、くさびを打ち込み、プロレタリアートによる権力奪取への原則的な路線を見事に否定したものである。

これ程、恥知らずな、方針があるだろうか！現実のさしせまる、生活難・反動化に直面しているが故に、客観情勢を正確に分析すればする程、ブルジョアジー、戦史上最大の総反撃を労働者階級の上にかげようとしていた時期であるが故に、われわれは、革命的労働者として、前衛として、激しく警鐘を乱打せずにはいられない。

最早や死物と化しつつある労働組合組織に、革命の武器を与え、プロレタリアートの任務を提起し、巨大な斗争力をよみがえらせる為には、圧倒的な労働者を獲得しなければならぬ。

市場の拡大や、中左主義や、独立、平和民主という、民族民主主義の強化に、プロレタリアートの闘いを解消する事は、ブルジョアの激化する中では、敗北の路線しかあり得ない。このように産産党と民同の、反階級中賃上げ、首切拒否、最賃確立、反動的諸的ゆ着と妥協の産物が、春斗方針であり、立法粉碎の為史上最大のゼネストを持つて公務員労働者の、今こそ、国家権力

の心臓部に、ストをもつて迫る事だ。スト権奪還を、正に、緊急の面も、具体的闘いの中でこそ、実現すべきである事、そして、今春斗の中で、政府、独占の死期を早め得るかどうか、即ち日本の労働者階級が、革命に近づき得るかどうかは、労働者が、意識の遅れた所に統一するのではなくて、全労働者階級の、ストライキによる、独占権力への対決を、何処迄現実化し得るにかかっている。従つて、その大きな障害となつては、民同、日共路線の謬誤を階級斗争を徹底的に闘い抜く中で、明らかにする為には、根強い、鋭い、批判勢力、高度の指導性を具備した闘いの中核をあらゆる生産点に確立する事である。

われわれは、何時、何処でも、革命の準備をしなければならぬ。如何なる斗争も革命的に指導しなければならぬ。

理論

組織論メモ

浅田隆治

(一)

先ず、我々が検討せねばならないのは、ブンド崩壊後新左翼のイニシアを握つたかみられる革共全国委である。そのバックボーンとなつている黒田寛一の組織論は次の様なものである。

労働者は現実の生産課程において直観する疎外観をバネに、下向分析にうつり、本源的・蓄積課程において、労働者が暴力的に生産手段から分離されたことを確認し、さらに、それを階級社会一般の所有と生産の分離として抽象し、そこから上向し、共產主義社会をつくらうという、世界的使命を自覚するという。そして、その自覚に基いて展開するのが階級斗争であるという(1)。

それはなぜプロレタリアートは革命の主体になるかという論理、いわゆる主体性の論理としては、一応討論の対称になる。(2)だが、黒田寛一の場合、これが、直接、現

実の組織論として展開されることに特徴がある。

すなわち、現実の斗争を、個々の労働者が、かゝる上向、下向を行うための契機としてとらえ、それを媒介にして、学習会を行い党内吸収していくものとして設定されるのである。そして革命をプロレタリアートの斗争と名づけ、その革命の構造を、党が拡大していく課程として画き上げるのである。

なる程、現実の労働者の心理的意識と共產主義意識の間には大きな分裂が存在する。だが、この間を一種神秘なる党をもつて埋めてきても、なにごとく説明しないのである。現実の数々の闘いを一つのプールにし、そこから「自覚した労働者」をつくるにせよ、いつの日にか……という

のが、彼等の組織論の全てである。かくて、プロレタリア革命は全く不定の未来のおしやられ、革命と現実の闘いに万里の長城を

築き上げるのである。組織論序説で展開された。学習会からはじまつて真中に細胞がある何重かの円環の最も外ワクである産業別委員会組織が成立した時にはじめて革命となるのである。「組織論を人間論として展開する」(3)といながら、実は、現実の大衆の生き生きとした意識の変化、創造性は全く消え去るのである。

これに対する反発からうち出された先駆の芳村論文は、黒田批判については正しい指定を行い、問題意識の鮮明さを示しながらも、問題の解明に成功したとは言えない。彼は、一九一七年と一九〇五年のロシアの革命、一八七一年のパリ、コンミュニョン、一九五六年のハンガリア労働者評議会の分析から、プロレタリアートが、いかに自己の権力を築き上げたかを調べ上げ、そこから次の如き結論をひき出している。(5)

① プロレタリアートは、自己権力としてソヴェエト型の組織を必ず創造する。

② 党なる政治集団は、それに政治的方向を与えるものである。

③ 党の組織形態は歴史的、社会的に決定される。

④ プロレタリア権力が樹立されれば、党は意識的に破壊されねばならないと。だが彼は結論を急ぎすぎた。

彼は結論を出すまえに、次の行為を行わねばならなかった。即ち、プロレタリア権力がなせうちたてられねばならないか。そしてまた、マルクス主義では同義語になるのだが、なぜプロレタリアートは権力を握り得るのかということである。

彼の論理によれば、泥棒集団ですらも、権力を保持出来ることになるのである。

党とプロレタリア独裁の論理は、この二つを論理的に説明することから生れ出る。それは又、芳村氏が、見落したが故に誤ったことを批判することにもなる。

次に芳村氏の論理をもつて組織されるとみられる東京社会学同の諸君に一言。「政治は基礎論文では出来ないのだ」芳村氏は、党が歴史的社会的に規制されるという結論をうち出し、またプロレタリア権力は、労働者階級が斗いの中から創造すると述べている。

だが、彼は、歴史的、社会的条件の分析は全然行っていないし、又、はげしく展開されている日本の階級斗争の中にプロレタ

リア権力への志向をみつけようとはしていない。これらの行為を放棄して結論だけを、直接的選択を迫られる政治の場面に適用するならば、「既成の組織を全部つぶせ」という結論以外生れ出ないし、自らの組織さえつくり出す方向をみつけられない。そうして、そういう行為を彼等はやつている。だが、自らの解答をもたずに「既成組織をツブセ」とさげぶのは、資本主義に自らの運動を止めよということであり、それ故、絶対に成功しないのである。

トロツキーとレーニンの偉大であったことは何か。それは彼等二人が、ロシアで展開された革命の戦術を「普遍化し、一般化して」ユミンタインの諸原則としてうち出したのである。

そして、それが、一・二回大会の思想的立脚点、一般原則だけにとどまらず、三・四回大会としての諸戦術として定式化したことであつた。この時から全世界でマルクス主義は、名実共に、一つの運動となつたのである。

オニインターは、現実に成起する斗い、

それにあらわれる労働者の意識が当然にも決つて革命的でないことを利用して、プロレタリア権力を遠い未来の夢物語に替え、マルクス主義の名を冠りながら、日和見主義的実践を行ったのである。オニ一次大戦の終結と共に到来した革命的危機の時にも、「労働者はまだ成熟していない」という口実のもとに、見事に、革命をすりぬけてきたのである。だが、コミンテルンの三・四回大会は、「我々は、プロレタリア革命にいたる一連の系列のための斗争を展開する……」のもとに、現実の斗いとプロレタリアの万里の長城をうちこわし、運動としての連続性をつくり上げたのであつた。

トロツキーとレーニンの言葉を六十年の現実にもつてきても有効性をもちえないことは当然である。だが、このことは決して、いま新左翼がトロツキストという名を冠せられながらも、トロツキーを放棄していつてゐることを正当化するものではない。

革共関西派とトロツキーを二重写しにするのは全く危険である。彼等は、いわば、トロツキーの邦訳者にしかすぎない。彼等の論理は「〇〇年〇〇月かくかくの情況で

トロツキーはこうした。だからわれわれも云々」である。

こんなことでは、誰に対しても説得性をもち得ないし、新しい世代と結びつくことも出来ないのは当然であるが、だからといって、トロツキーではダメなのだということではない。われわれは、革命家としてのレーニン・トロツキーが当然にも政策としてうち出している諸原則を抽象していかねばならないのである。革共関西派には、その能力がなかつた。われわれは、その抽象から出発して、現実の諸条件の中で、トロツキーの諸原則を再構築し、検証する作業をはじめねばならないのである。

私は、コミンテルンの諸原則として明らかにされたプロレタリア革命の組織論を抽象し、再構成し、現実に適用していきたい。右記の展開は、あたかも、各潮流にたいする批判のようである。だが、私は当然にもこの中で、われわれの関西ブンドの自己批判をも展開しているのである。

ブンドの破壊と崩壊については、黒田寛一の批判が妥当する側面をもつていた。即ちブンドには組織論、階級意識論について

の問題意識が全くなかつたことは事実である。現実の斗いからいかに権力に到達するかについて反問されることがなく、現実の意識のまゝでの自然発生的ラディカリスムの中に革命性と、権力への接近を夢想していたのである。

黒寛はその間を党を増やすことで埋め（共産党と同じ）それへの解答を与えようとしたのである。

われわれが、全学連の十七回大会に提案したいいわゆる「政治課程論」なるものも又、それに対する解答をもさくするものであつた。

だが、これは、「革命の発展」をヘリコプターでながめ、えがきよれば、こうなるということであり、その点で諸氏から丁戴した客観主義、社会学という批判も、一面ではあたらぬことではない。

われわれは、かくのごとく、展開して革命の内面構造が、いかになつていくかを組織論として構築していくことにより、それに答えていきたいと思つている。

組織論は、次の如きものを満足させて展開させねばならない。

- (1) プロ独の本質、機能、そこでの労働者階級と前衛の関係。
 - (2) 資本主義下における労働者階級の意識とその不均等発展。
 - (3) 日本における労働者階級の状態と意識状況（斗いの総括として）。
 - (4) 前衛組織の本質「機能」。
- 現存する諸組織の位置づけと役割。当面する組織戦術。

最後にわれわれは、レーニンの組織論が機能論であることを、レーニンの限界としてではなく、レーニンの優れた点として考えてみたい。機能論をぬいては、ルカーチ的限界を絶対に突破出来ないから。

(二)

「国家は、支配階級の諸個人がかれらの共通利害を主張する形態、そして一時代の市民社会全体が集約されている形態である」(ドイ・イデオロギー 九四頁)ここに、国家の全てがえがかれている。

生産と共に人間生活がはじまり、人間は一定の協働関係を結ぶ。そして、その協働関係は、自らの維持という一つの共同利害

を形造る。たとえ、階級社会であつても、そうである。二つの階級に社会が分裂している場合に於ても、それは、分業という形態での、両階級の協働関係を表示している。資本主義社会においては、資本・賃労働関係として具体的にあらわれる。疎外された形態であつても、そこで展開される労働は物質的財貨を生み出し、かゝるものとして、この両者の間では、この資本・賃労働関係という生産関係とその時に保持される生産力との統一としての一定の生産様式の維持という意味での共同利害が発生する。国家とは、つまり、この「共同利害」を「集約」し「維持」していくものなのである。資本制国家とは、資本・賃労働関係として基底をすえらるる、獲得の生産様式を維持するものなのである。「政治的共同体が、政治的解放者から、これらの人権（資本制生産様式維持のための各個人の独立権利）のたんなる維持手段にひきまげられる」（ユダヤ人問題）、そして「ブルジョアとしての人間が其の人間として考えられる」（同右）ということをもつて、この共同利害の実現が、支配者階級の特権利害の貫徹となるのである。「自由、平等、平和……等々の

ブルジョアジーの相言葉こそは、各人を普遍に分解させ、独立化させる（資本制）社会再生産のための必須条件となり、「法」断として確立されるのである。（神聖家族）プロレタリアートにとつて、この資本・賃労働関係の再生産とは、普遍に疎外をつくり出し、「ますます、みじめなものになつていく、課程であり、その意味で、この共同性は、真の意味での自らの利益ではありえず「幻想」である。労働者階級は「共同的存在」から「部分的存在」としてふるまう領域の低位におとし入れられる」（ユダヤ人問題）のである。だが、資本・賃労働関係が、スムースに再生産されていき、労働者が、日常的意識のままにあれば、彼等にとつては、この共同性は、幻想としてではなく、實在的基礎をもなつていゝのである。(1)ここにルカチのいうところの「共同責任の観念」(2)、トロツキーいうところの「上部構造の慣性」(3)が発生するのである。かくて、我々はレーニンという国家の本質規定「国家は階級支配（資本・賃労働関係の維持）の道具である」に到達するこ

よつて、万人解放への巨歩をふみ出す」という、客観的法則性としての、歴史性としての共同性が存在するのである。ここで、プロレタリア独裁に於て、党と暴力の問題が、それ以前の国家とはちがつた意味をもつてくるのである。

に自覚した労働者をもたない限り、国家としての存続は不可能であり、エピソード的なものとして終つてしまふ。前衛の本質が意識性だとすれば、その意識性の中にこそ一般利害は、含まれているのであり、プロレタリア独裁は意識的に、共産主義社会へ全人類の解放にむけて動き出さないう限り、その共同利害を実現出来ないのである。したがつてプロレタリア権力の維持、強化は不可能なのである。

プロレタリア国家の政策として、「その意識的な共産主義への移行のための諸政策」とならしめるもの、それは、自然発生的な会議であるとか、自発的な創意とかの空語ではなく、自覚した分子（前衛）の首尾一貫した意識的計画である。」(ソヴェト権力の任務)

プロレタリアートの歴史的役割の中に、それが、生産を規制し、社会主義へ前進するという行為そのものの中に、一般性が存在するのである。津田道夫は、人民戦線綱領で、労働者階級が小ブルの要求をかゝげたことの中に、特殊利害と一般利害の統一などという「思想的意義」を見出しているが、かくの如きものはマヌーバーであつて、そ

プロレタリア独裁を実現する労働者階級の構成員は大部分は決して、首尾一貫したイデオロギー体系をもつた労働者（黒寛のいう自覚した労働者）ではない。資本主義の現実、その内在法則の故に到来する決定的危機の中で、いわゆる「集約性が完全に破壊され」（全学連への京都府学連提案）した時点で、もはや、自らが生産を組織する以外に抜け道がなくなつた労働者階級が、生産を掌握するのである。誤解の許れざる論文をとるならば「強制されて」「やむにやまれず」権力をとるのである。なぜなら、権力をとらないことには、一層の資本の強化と抑圧の激しさをますのであるから。

だから、ある歴史的、社会的条件を前提すれば、党なしで、プロレタリア独裁が樹立されることは十分ある。一八七一年のパリ、コンミュンから一九六〇年のキューバ革命まで。だが、それらの革命は、内部

に自覚した労働者をもたない限り、国家としての存続は不可能であり、エピソード的なものとして終つてしまふ。前衛の本質が意識性だとすれば、その意識性の中にこそ一般利害は、含まれているのであり、プロレタリア独裁は意識的に、共産主義社会へ全人類の解放にむけて動き出さないう限り、その共同利害を実現出来ないのである。したがつてプロレタリア権力の維持、強化は不可能なのである。

プロレタリア国家の政策として、「その意識的な共産主義への移行のための諸政策」とならしめるもの、それは、自然発生的な会議であるとか、自発的な創意とかの空語ではなく、自覚した分子（前衛）の首尾一貫した意識的計画である。」(ソヴェト権力の任務)

プロレタリアートの歴史的役割の中に、それが、生産を規制し、社会主義へ前進するという行為そのものの中に、一般性が存在するのである。津田道夫は、人民戦線綱領で、労働者階級が小ブルの要求をかゝげたことの中に、特殊利害と一般利害の統一などという「思想的意義」を見出しているが、かくの如きものはマヌーバーであつて、そ

んなもので歴史は決せられない。芳村氏の論では、革命後、党が廃止されるであろうが、そんなことではプロレタリアートの目覚め（彼の場合、ソヴェト）の全構成員が、自己の歴史的役割を首尾一貫したイデオロギーとして確認してない限り、社会主義への前進は、不可能である。また歴史は、そうなる以前に労働者による生産の規制を強制するのである。人間の意識は完全に分裂しており、また分裂しているからこそ革命運動は存在するのである。ロシアでは、内戦終了後、長い戦いで勤労意欲を失つた赤軍大衆が、多くの地点で、強盗強姦団を組織した。

だが、彼等も十七年から二十一年までは、「自己権力の構成員であり、偉大な十七年革命を創造した主体なのである。プロレタリアートは権力獲得後に於ても、自己の体内に、「個々の地方的、職業的利益ではなく、労働者階級全体の利益」に忠実な、首尾一貫した意識分子をもたねばならない。実は、自己権力なる抽象用語、科学用語はそれ故にまさしく、党とソヴェトの構造をあわせて表現せねばならないのである。階級の死滅と共に、労働者階級の利害が

即目的に全体の共同利害となり、そこで歴史性を表示する党は死滅する。だが党の自己止揚は即ち、社会主義の物質的基盤の完成と、労働者大衆の意欲変化である。

芳村氏は、「二十一年にはソヴェトは有名無実となつていた」などとデッチ上げを展開し、(全集を忠実に読み、ソヴェト大会の演説をみよ)レーニンを代位主義(5)と名づけ、そこから黒寛を批判している。だがレーニンは黒寛と一緒にされて至極迷惑である。

黒寛の誤りにはプロレタリア革命の実際の課程を、自己の体系のまわりに人が賛成して集つてくる課程としてしか彼はえがけないのである。だが、それは抽象であり、それ故實際課程では死んだ図式である。資本主義の運動課程そのものが、国家としての集約性を破壊し、一層の悲惨をさけるためには、労働者階級が統一され、生産を計画化し、工場を占拠し、その主人にならねばならぬという時期が来ることを予想出来ず、そして、労働者は、理念としての「プロレタリア独裁」ではなく、具体的計画と行動を支持して、それに参加することを考えるのである。そして、明日のメンだけを考

えば、革命政府だといふのである。だが問題

明日の平和と休息だけを考へてそうした労働者ですらも、その具体的な生産規制の行動の中で、自己の歴史的使命に目覚めていくのである。「共産主義的意識の大衆的な産出のためにも……人間の社会的変化が必要であり……革命に於てのみ起りうるのである」(ドイツ・イデオロギー)だから、プロ独の組織形態たるソヴェトは、一つのイデオロギー体系によつては統一されず具体的行動において組織されるといふ意味での統一戦線なのである。(6)なぜなら、階級の大多数・直接的生産者の大多数が統一されないような組織では生産の規制・計画も、それ故プロ独も不可能なのである。そしてソヴェトがこの様に内部に於ても廃止されてはならないのである。黒寛の誤つた見解の根源は、実は日本共産党である。彼等は、「民々統一戦線」が革命権力かどうかを「党の影響が貫徹しているか、どうか」(7)にみている。同じ要求で、同じ組織形態にありながら、社会党が多いときは革命権力でなく、共産党が多くなれば、革命政府だといふのである。だが問題

はそうではない、労働者階級が、いかなる要求で組織され、いかなる組織形態にあり、いかなる(大衆の)意識状況にあるか、問題である。我々は、「民族民主」なる要求では、労働者は絶対、自己の権力組織に統一されるとは考えないのであり、「国有化」を中核とした社会主義的要求に於て、真の統一が確保され、真の組織形態がソヴェトに組織されるとき、はじめてブルジョア権力を破壊する行動に出られると考へているのである。そして、それが実現される時には、必然的に、我々がヘゲモニーを握つていようであろう(なぜなら、他はそれに反対するのだから)といふことである。

革共全国委が、以前に「日本を従属国」と規定した綱領をもつていたのは、まさしく黒寛にとつては、労働者が権力組織にいかなる要求で組織されるかなどは問題外であつたのだ。これは彼が、ソヴェトが具体的行動における統一戦線であることをみない点にあつた。

資本主義分析こそ、この労働者の要求を決する鍵を与えるのであり、それがプロ独樹立の根本問題をなすのである。

資本制国家の権力が安泰であるかどうかは、資本主義の「自然法別」の動向がなによりも規制することを、はじめにのべた。即ち、労働者の生活が満足されていけば、いるほど、国家の共同性の幻想は強まる。労働者国家に於ては、かゝる「自然法別」を拒否していく以上、権力の強化のために自然発生的に生じる幻想を利用することは出来ないことも述べた。ここから、プロ権力の維持について、ソ連の問題とあわせて、多くの意見が出されている。スターリニズムを現象的に(右翼的に)批判する人々は、プロ独に於ける「組織性と規律」と「暴力」の問題としてのべている。津田道夫は、その典型である。だが、「組織性と規律」が社会的機能であり、「暴力」が階級的規範であるとのべても、解釈学にすぎない。プロ独に於て、一切の自然発生的幻想を拒否する以上、プロレタリアートと諸階層の関係に於ては、完全に、暴力に立脚するのである。例えば、小ブルに「組織性と規律」を与える時にも、武器を背景に行つたのがレーニンであつた。内戦の時期、赤軍は、武器を背景に、農民から自分の食べる食糧をうばいとり、武器を背景にブルジョアジ

ーにソヴェトによる記帳を強制したのである。「未来社会に於てはお前等も解放されるんだ」との字形を与えて。赤裸々な完全なる独裁！労働者以外の諸階層にはソヴェトの投票権を、労働者の要求を支持するといふ条件をつけなければ与えなかつたのである。「農民に土地を与える」などというものは、一般利害を実現したのではなく、国家を利用したブルジョアジーとの階級斗争で、労働者階級が農民と同盟したのであり、プロレタリアートの「プレス」の独裁の機能が停止されているのである。レーニンは「食糧税について」の中で「独裁か、協定か」としてメモしているのである。

梅本克己によれば、スターリンは、そんなことを、津田道夫などよりはよく知つていたそうである。

階級なき社会へ不断に前進することによつて、プロレタリア権力の権威は高まり、住民の、それへの忠誠は強まる。かゝるものとして、共同性は生れていくのであるが、スターリンは、かゝる方向への前進を指導することが出来なかつた。そして、それ故に共同性が破壊され、生れ出るプロレタリア権への不満を、社会主義の理論を修正し、幻想的イデオロギーをつくり出し暴力と官僚体制の整備で応えてきた。彼のクラーク政策こそは、その典型である。だから、彼の誤りは、プロレタリア権の具体的な政策として、特に経済政策と世界革命政策に於て、それが、いかに社会主義への道からはずれていたのかを指適することによつて行われねばならない。今は黒寛氏の関西の要人となつた某君は、「スターリンの経済政策は大体正しい」などとうそをいいたが、珍奇な「反スターリン主義者」もいたものであるし、フルンチョフがいかに官僚主義を批判しても、新たな幻想的イデオロギーを生み出すだけであつて何の批判に

もならないのである。

(三)

編集部注 以下の(三)と(四)は紙面の都合上としてまた、未完成な部分が相当含まれているので、概略だけ編集部でつくりかえるにとどめたい。

① 「共産党宣言」にえがかれた労働者の革命化の叙述は、歴史的動向を示したものである。まさしく客観的存在としての革命主体である労働者階級をえがいたものである。

われわれのなさねばならぬことは、この課程を内容的に労働者階級の具体的斗争の発展と意識変化の見地から豊富化し、プロレタリア革命の戦略と戦術をうち出していくことである。

② 労働者の日常的闘いの契機は、資本主義の運動法則に規制されて与えられる。したがって、それは、いわゆる「体制内」意識・資本主義に依存した要求である(賃上げ etc)。そこには完全な形で、労働者階級の歴史的役割の確認としての階級意識は存在しない。しかし、「自然発生性は意識性の萌芽である」(なにをなすべきか)

の通り、労働者階級の特殊利害を主張するという形での階級意識の萌芽が存在する。

③ そうした労働者の闘いは、目的が達成された時か、目的が達せられないとわかつた時に、終了する。前者の場合は、支配階級の中にくみ入れられたのであり、(共同利害として確認される)後者の場合は、生産課程から発生する幻想性の前に屈服し、どちらにしても依然として資本主義への依存性を保持したままである。どれほど資本主義の客観的危機は進んでも、こういった状況はかわらないのである。なぜなら、常に労働者の闘いは、日常的要求から出発するのであるから。

だが、資本主義への依存性、現実の国家の共同性に対する幻想を保持している限り、絶対に革命は起らない。

④ この労働者の闘いの中に存在する分裂が前衛党存在の根拠である。労働者階級は常に選択をせまられる。すなわち、これまでの彼等の生産の中ではぐくまれてきた数々の意識(先述の「共同責任の観念」「上部構造の慣性」と現実の自らの利益の間での。そして、それは、階級内部の不均等性(意識における)として

あらわれて来る。

だから、労働者階級は確固として自己の要求を貫徹していくためには、その体内に意識的分子の集団が組織されていなければならぬ。

「労働者階級の存在としての革命性」とは、結局、この内部における意識的集団が勝利しうることである。

⑤ 社会党・共産党などの組織は、この日常の労働者の意識を代表したものであり、その限りで、彼等は、運動の出発点の組織者となり、ヘゲモニーを握ることが出来る。だが彼等は、労働者階級の要求を不断に最後まで首尾一貫して追求しようとはしないのである。そして彼等は、革命的危機に於ては、おくれた部分の意識を代表するであらう。

⑥ 労働者は、その闘いに於て、自らの意識と要求に応じた組織をつくり出す。歴史的に、資本主義の法則に最も規定された賃上げとして出発し、そのための組織として労働組合としてはじめにあらわれ出る。

この労働組合としての結合は、労働者階級形成への才一歩であり、階級斗争の戦線をさらに広める。前衛を生み出す基盤をつ

△全国ニュース(一)▽

社会党大会と労働運動の地すべり

社会党大会は、またしても日本の左翼主流のもつている問題をすべて包んだ形で提起したようである。結果は、しられていくように、討議の大半を構造改革の是非をめぐる論議についやし、東京都連の「構造改革は当面の戦術とする」という修正提案で両派が妥協し、逆転勝ちで江田書記長再選が実現した。

この間の経過について、ジャーナリズムでは、抽象論と党内で、政治感覚の新鮮な層の進出を背景にしたと派閥抗争の混合物という批評が一般的であり、構造改革論争が、高度な政治論議のようにみえながら、実は、「政策」どころか、政党としての運動の展望がボケたうえでの論議でしかなかつたことを、逆の右翼的立場からひやかした結果になつている。

ところで、この大会のもたらしたものは何であつたらうか。

社会党大会に、本来ならば、党員として、又、最大のプレッシャー、グループ

としても、最大の行動を起すべき労働者同志会を中心とする、総評民同は大会前から異常な現象をみせはじめていた。即ち、太田議長は構造改革批判とは逆に、民同内でも国際自由労連グループとして有名な原口全敏委員長、宝樹全通委員長、高垣炭労委員長らが、「江田書記長再選」をめざして活動をはじめ、岩井事務局長は奇妙な沈黙をまもつた。そして、大会の結果に対して一応満足の意を表したのである。安保、三池の右翼的総括から、「日本の組合主義」路線という経済主義へ大きく右旋回したにもかかわらず、いまや、ここ数年間の支配的均衡である太田・岩井ラインを崩してしまふような地すべりのな右傾化がはじまつた。

日本における構造改革論争は、日共内における民族路線に対する抵抗や、社会党のいわゆる「防衛ラジカリズム」の右寄りの総括から、急速に、致命的に運動論、組織論の観点から遠ざかる方向で出現した。そ

して、社会党主流の所有物となつたときには、みせかけの理論性とは全く逆に、大衆闘争とは無縁のものとして、戦略戦術論争がたかかわされる。このことに対して、労働派マルキスト向坂逸郎らが本能的な警戒心をかきいだしたのは一理あることであつた。イタリアのかつてのネンニ派社会党とならんで世界でも稀な左翼社会民主主義政党である日本社会党は、戦後たえず、情勢が緊迫するたびにブルジョアジーの洞喝と、大衆闘争の昂揚を二つの支点とした動ようをかさねてきたが、日本帝国主義の基盤の再確立という、第二次大戦後以降、最も大きな局面転換と、それに伴う政治地図のぬりかえをブルジョアジーが強要しているときに、労働運動のなしくずしの右傾化の一

大契機となつて現象するようである。逆にいえば、日本の左翼社会民主主義の基盤そのものが危機にたたされつつある。かつて勤評斗争から安保斗争にかけての一時期、新左翼の立場から、「指導部の危機」が幾度となくくりかえしてきざされたが、指導部の危機とは、たんに情勢に対応しきれない指導部の無能とその追放ではなくて、情勢の展開が要求する。労働運動、政党活動

の波及過程を、如何に個々の斗争を、有効、危機をくいよめることができるという非現実適切に全国抗争として展開し、政治的昂揚をつくりだしていくか、という組織論的展望によつて、いどめ、かつ逆にきりひらいていくかということである。政治的スローガンをかかげることによつて、労働運動の

(園田)

△全国ニュース(二)▽

春斗状況とその課題

春斗のテープが切られようとしているにもかかわらず、今だに総評を中心に労働者階級の状況は混迷のままである。

公労協民間特に金属との共斗が中心課題に設定されているが、金属の中でも特に鉄連に於ては、八幡製鉄のスト権確立が、統一斗争スケジュールの中心になつてゐる。

即ち、二月十一日にスト権の確立が組合大会で確立された場合は、三月二十日に、春斗共斗の第一波全国統一斗争。更にスト権の確立が二月十八日の場合、春斗第一波が三月二十七日の予定である。

これに合せて公労協も、スト体制確立のために具体的組織化を計り、当初の斗争の

やまの設定が、それ故に、三月下旬より四月に至る時期に変更されたという事になる。我々は今回の大巾賃上げを中心とする闘いが、官公労と民間との共斗によつて闘い、その体勢そのものに反対はしない。しかし表面的な体勢ではなく、組織体制としても、いかに取組まれ、進展しつつあるのかという点では警告をせざるを得ない。

具体的には二月二、三、四の三日間、全電通は中央委員会に於て討論された内容からしても、すでに従来の如き民間幹部の請負斗争の限界は明確に露呈した訳であるし、ではその限界を超えてとなつた場合、全く無方針であるとの状況に至つてゐる。現に、

唯一の斗争姿勢をみせた動力車労組の中央委員会も、二月下旬に開かれるのが無期延期になつてゐる。しかも、下部大衆は物価値上げ、生活費の高きからして、絶対大巾賃上げをとらねばとの状況になりつつも、組合の方針の動揺に、いかに闘うかの点で全く理解どころか、その状況すら知らされていない状態なのである。

この様な状況の中で若干なりとも斗争姿勢をみせる部分については、当然予想される敵の攻撃に対し、一体いくらの保障があるから我々にはストを構えてやれるのかという様相を示す。その意味で、電通に於ては、中央は一人三千円の春斗スト資金の積みたてで、来るべき処分に備えその範囲内で闘うという形になつてしまふ訳である。勿論電通近畿は、その点では更に積極的に、一人五千円のスト資金を用意してやる。つまり発想の根源には斗争するにはそれだけの準備をしてとの点、その裏には下部組合員への不信感があるのであり、大巾賃上げを要求するならば、それ位のスト資金すらも出せなくてはとの結論になつてしまふ訳である。勿論、この思考方法は、闘い闘いと単に表面的に叫び、適当に妥協して組合員を

裏切る従来の方法よりも、実質的に闘う体制を作るとの比較の点に於ては、程度の問題としてはましであらうとはいえる。公労協での唯一の斗争姿勢をみせた動力車労組の斗争資金が一人四百円にくらべると、その意味では電通は、斗はない組織からの脱皮とみえないこともないが、スト権奪還、ILOの批准、日韓会談反対、政暴法、等々の、労使の決定的対立問題を数多くかかえてゐる現在での、労働者の体勢としては、どうも情けないが、しかしこの指導の無き状況の中にあつて、下部のエネルギーの爆発化の要因はすでにみられて居り、その発火を不発に終らしめない体勢を、我々こそが作りあげ、現状肯定の中で斗争の観点を今春斗で徹底的に打ちやぶらねばならない。正しく、今春斗はその時期であり、しかも全労の和田書記長が嘲笑する如く、仲裁案が出たら、総評は斗いませんよ、それでやるならつぶれますよという予言通りになるであらう。

現階級情勢の中で、単に春斗は、経済斗争で終るものでなく、政治斗争化せざるを得ないものであり、またそこに重点がある筈である。公労協が全般的に低調であると

いわれる内容は、むしろ指導の問題として、必ず批判の中心になるであらう。そこには民間内の分裂は必至であり、再編過程が議論の中心となる事も当然予想される。それは左右への分解過程を必然的に生みだすであらうし、全労の喰い込みも、資本の側の援助のもとで、全般的になされるであらう。その流動期の中で、明確に今後の階級斗争としての労働運動の位置づけをした上で方向を提起する指導部の必要は、安保の時期以上に要請されるであらう。

これは必然的な今春斗の闘いの中の、問題として、我々は受けとらねばならぬ。その対応如何が、今後の階級斗争の方向を、新左翼潮流の生存をかけた問題として出されるであらう。

編集後記

我々は、この活動を続けるなかで、当初我々が目標としたこと以上の任務がのしかかってくるのをひしひしと感じている。

我々は決意せねばならなかつた。そして、今、その実行のための慎重かつ周到な準備にとりくんでいる。

六号は、それに向けての第一歩である。読者諸君は、静かなうちにも秘められた我々の決意を読みとることができよう。

(大崎)

(五)

